

# 日曜日には TVを消せ No. 1

★74. 11. 17(日)

★南局記念特別番組★  
＜夢の島少女＞

★制作★PHC・TV

★提供★混血桃色通信=PHC  
(豊橋市東小浜町129  
白井方・藤田真男)

## 南局(創刊)にあたって

先日、佐々木昭一郎というNHKのTVディレクターが作った＜夢の島少女＞というドラマを見て、ひどく感動し、その勢いで、かぬてより企画、中まにたものポシャったままに、TV批評誌を、この際、何でもいいからと、かく出してしまおう、そう思ってこの日曜日はTVを消せを發行するわけなのだ。

昨年、日本のTVの歴史は20年に達した。アメリカのTVに比べれば、ほぼ半分の歴史しかないが、それでも、すでに来たところ、まど来たよ、うな感じ、じり、下着るVとは初めから、どこへ行くべきものか。あとも、年、いえるの、だるうか。あと20年、このままの形で続くかもしれない。そうならないか。

TVは＜番組＞であって＜作品＞ではない。従って＜TV批評＞など成立しない——と、佐々木守がいうのは正しい。それは、現在に至るまで、＜TV批評＞が、どこにも存在しな

たという事実からも明らかだ。TVとは何か? TVに何が可能か? と問えば、結局、技術論しか返ってこないはずだ。「どうにもこうにもテレビジョンとは器械である」(佐々木守) すべてこの画像は現れると同時に消えてゆき、後には何も残らない。だから＜番組＞なのだ。たしかにそうだ。それでいいのか、よくないのか——という設問さえ無駄なことのように。

ともあれ、これまでずいぶん長い間、TVをみてきたし、これからみ続けるだろう。

ところで本誌は、当然にもTV批評の成立をめざすものではなく、TV局が一つ増えるようなものというならば、海賊放送——しかも大NHKに次ぐサービス・エリアを誇る!?——であり、卑近に言えばTV日記、すなわち個人的な覚え書き、もっと正確にいうなら、早い話がヒマつぶし。といってしまう、ミもフウもないか。

とりあえず、オ1回放送は、佐々木昭一郎と＜夢の島少女＞の特集。TV同様、読み捨てで結構。(M.G.MAO)



# 佐々木昭一郎

S11年7月25日生

東京出身

立教大経済学部卒

単発TVドラマ演出家

いま日本の代表的なテレビ演出家を一人だけ推薦しと言われたら、私は、なんのためらいもなく佐々木昭一郎の名を挙げるに違いない。

佐々木と私との出逢いは、いまから一〇年前、さる三八年二月に放送されたラジオドラマ「部会の二つの顔」だった。佐々木は、まだ無名だった宮本信子と魚屋志望の横溝誠洗というズブの素人を使い、深夜の六本木から夜明けの東京港までを描くことによって、人間が生きる喜びと当時の時代状況を「音」で鮮烈にうたいあげたのである。

ドキュメンタリーでもドラマでもない、この新しい手法をひっつけて登場した彼はラジオで「コメット・イケヤ」(一九六六年度イタリア賞グランプリ)、「おはようインディア」(昭和四一年度芸術祭賞)と次々と新鮮な作品を送り出し、四一年にはテレビ畑へ移り、ラジオでの方法論をテレビドラマで試みはじめた。

それが「マザー」(一九七〇年度モンテカルロ国際テレビ祭最高賞)であり、「さすらい」(昭和四六年度芸術祭大賞)である。とくに「さすらい」は、在来のテレビドラマに大きなインパクトを与えた作品だった。

つまり、一五年間、空想だけに生きてきた主人公・安仁ひろし(本名)が佐々木の設定するいくつかの状況のなかで、「さすらい」というドラマである。ドラマといっても佐々木の作品には脚本がない。設定された状況で映像化される過程そのものが脚本なのである。

制作される過程での即興性、偶然性が設定した状況をつき破り、きわめてヴィヴッドな映像となって見ている者に深い感動を与えるのである。私は見ているアントニオニーやフェルリーニを、はるかに越えたテレビ的な新しさを感じたのである。

その佐々木は「さすらい」以後、作品を發表していない。銀河ドラマのADを黙々と勤めているのだ。NHKという巨大組織は不可思議なところである。(青木貞伸)

## (映画評論・74年1月号より)

★佐々木昭一郎について知り得たことは上の紹介文に書かれていることが、そのすべてである。青木貞伸は「放送批評」の編集長をつとめる人であり、同誌のバックナンバーになら、佐々木昭一郎や彼の作品(いや番組というべきか)について論じられていくかもしれないが手に入るのはムリだろう。

TVがTVである

## 金の卵ゴロゴロ、層が厚いNHK演出班

今秋の芸術祭出品作品にみるNHKディレクターの層の厚さは、あたかも無敵艦隊のおもむきすらある。

出品作をざっと列挙すると「あの角の向う」(大原誠演出、以下同じ)、「じゃあね」(松尾武)、「浪花二人節」(田中昭男)、「終点はどこですか」(佐藤満寿也)、「幻のセイルスマン」(高橋康夫)、「夢の島

限り、TV雑誌も放送関係者だけを対象とするか、番組の「イド」にとどまるしかない。前者としては、各局の社内報や労組の林園誌があり、後者としては「TVガイド」や「TVファンの」の二冊があるのみ。しかも「TVファン」はローカルには出回っていない。他に最も広く放送メディアを扱う雑誌で市販されているのは、NHK「放送文化」

少女」(佐々木昭一郎)など、中にイタリア賞出品作もあるもののその数はいたって多い。

いずれも三十五歳前後の若手ディレクターで、中には、すでにいくつかの芸術祭賞を得ている人もいる。もちろん海外の芸術祭賞を受賞したつわものもいて、まさに若手演出家の腕の競い場となった観のある芸術祭だ。莫大なカネとヒマをかけているので当然、とする声もあるが、野球の巨人の多摩川同様金の卵がゴロゴロ。

# △マザー▽

作・演出 佐々木昭一郎  
カラー・60分

69・12・28 NHK・GTV  
(総合テレビ)

「おはようぼく」の海という  
タイトルで放送

70年イタリア賞参加  
(69年芸術祭には不参加か?)

70・8・8 NHK・GTV  
「マザー」と改題して放送

71年2月・モンテカルロ国際TV  
賞参加。最高賞・ゴールデ  
ンニンフ賞を受賞

71・2・28 NHK・GTV  
モンテカルロ受賞のため再放  
送。

右の資料は「NHK年鑑」に  
よるものだが、初放送が12月28  
日というのは、少し妙存気もす  
る。10月28日のミス・フリか?  
それとも、やはり単発ドラマと  
して12月に放送されたのか?

また、前頁の青木貞伸の文は  
70年モンテカルロとあるのは、  
70年夏という意味か、71年  
のあやまりと思われ。まア、そんなことは、どオで  
もいいのだ。ぼくは、「おはよ  
うぼく」の海というタイトルで  
の初放送も、「マザー」として  
の再放送も、共にみたような記  
憶があるが、なにしろ古いこと  
なので、くわしい内容までは覚  
えていない。というより、そも  
そもシナリオのないドラマをコ  
トバで説明することが困難なの  
だ。それは、佐々木昭一郎の3  
本のTVドラマすべてについて  
いえることだ。  
それではオハナシにならな  
いので、覚えていいることだけ書き  
とめておこう。

多分、横浜。それとも神戸か  
他の街だったろうか。5年前、  
市電の走っていた港街であるこ  
とはたしかなようだ。  
夏のある日。港まつり、とい  
った催しが行なわれているその  
街に、ひとりぼっちの少年がい  
る。ただ、ひとりぼっちである  
——という以上には、少年の過  
去や境遇は描かれていなかった

ようだ。少年が街の中を彷徨う。  
カメラは少年のあとを追う。少  
年は、若いアメリカ人の女性へ  
だと思う。が、重要なのは、少  
年にとってその女性が、遠い海  
の彼方からやって来た、コトバ  
の通じない、見知らぬ他人であ  
るといふシチュエーションであ  
ろう。と出会い、一緒に街を歩  
き、カタコトで、ぽつりぽつり  
と意志を通じようとする。その  
様子を、カメラはじっとみつめ  
ているだけである。  
少年に母がいらないことがわか  
る。母についての記憶もなかつ  
たようだ。少年は、十二、三才だ  
ろうか。女の人は、まだ三十代  
に達していないだろう。少年の  
母より若いであろう。少年の  
かた。だから、お互いに母と子  
の感情については、ほんやりと  
しかつかめない。おまけに、互  
いの過去もわからなければ、コ  
トバも、ほとんど通じない。  
少年とその女性は、それから  
別れ、再び名々の場所へ戻って  
行く。  
少年の心に、母のイメージを  
追い求めようとする衝動がわく。  
もっと多くのものが、少年から  
失われているかもしれないが、

今は母を求めている。いや、具体的なそれではなく、また、母に代る女性やものでもない。おぼろげだが、大切な何か。失われかけたのか、まだ見出せないのか。だからハマザー✓なのだろう。そういつたことが、セリフなどで説明されることはなく、カメラは何の思い入れもせず、ただ淡々と、少年の一日をセミドキュメンタリー風に追うだけなのだが。

朝日の昇る、誰もいない港を少年が一人で駆けて行く。タイムトルからしても、太平洋岸であることから考えても、たしかに「おはよう」なのだが、ぼくには夕暮れの港であったような印象が強く残っている。

走る少年の影が、崖壁に長い尾を引く。行き止まりは、海。陽を浴びながら、海をみつめる少年の後姿で、このドラマはいささか唐突に終わっていたように思う。ラスト・シーンの印象は、少しさびしげだが、意外に明るく、はれぼれとしていた。二人の出演者は、共に素人であった。

# △さすらい✓

構成・演出 佐々木昭一郎  
 カラー 90分  
 出演 安仁ひろし・友川かずき・笠井紀美子・栗田裕美ほか

71・11・13 NHK・GTV  
 46年度(オ26回)芸術祭参加  
 TVドラマとして放送

71・12・10 芸術祭大賞受賞

71・12・16 NHK・GTV  
 芸術祭受賞のため再放送

72年3月・モンテカルロ参加

72年10月・サンフランシスコ国際フィルム祭(TV部門)に参加

これは最初、放送当日の新聞でキャストをみたら、フォークシンガーの遠藤賢司とか、ジャズ・ヴォーカルの笠井紀美子とか、変わった人が出ていて面白そうだなと思っ、偶然みただけ。まだ佐々木昭一郎の名は知らな

かった。遠藤賢司は、アルバムが少し売れ始めていたが、あまり有名ではなかった頃だろう。さすらい✓をみる、ほんの少し前に、ぼくはさすらい✓と所も同じ、日比谷・野音のステーションで、彼の唄をきいたことがあり、わり好きでシンガーになった。彼がこのドラマで唄った「カレライス」のシングル・レコードが発売されたのは、次の年の正月だった。

栗田裕美、すなわち現在の栗田ひろみ。彼女が出ていたといふことは、先日、NHK年鑑をみて初めて知った。どこに出ているのか、さっぱり思い出せない。オ一、当時の彼女は、俳優としては素人で、遠藤賢司よりも無名だったのかも知れない。TVのこ下か何かに出ている頃かな?一年後に「夏の妹」に新人として主演するわけである。

右の二人以上に無名で、今もお名の売れていないのが、友川かずき。さすらい✓では、フォーク・シンガー志望のペンキ屋を演じたが、現在では、一応プロのシンガーとなっている。

友川かずきは秋田出身。プロとしてデビュイ曲は「上京の状況」。ごく最近の曲に「生きている」って言うてみるしというヤケクソじみたぶっきらぼうな唄がある。シングル・レコード只今発売中。少し前に、ニの新曲のキャンペーンのため、名古屋へやって来てラジオに出た彼のナマの声をきいた。おそろしくボクトツな人だ。しゃべるとひどくドモったり、ロゴモったりするのにも、唄はちゃんと唄えるという人がいる。八天象儀館の秋山ミチヲがそうだし、森崎東「盛り場渡り鳥」での山崎努へ死に際に「鳥原の子守唄」を唄うのがそうだ。多分、友川かずきもそういう歌手なのだ。う。そして、佐々木昭一郎の「Vドラマも、それに似た世界なのだ。友川かずきは八夢の鳥少女」にも、チヨイ役で出演。

さて、ハサすらいVだが、どういうわけか、3年前の日記なんぞが残っていたので、恥ずかしながら、それをそのまま転載しておく。今は、日記どころか映画のメモさえつけていないけどぬ。ズボラになつたミ。

▽71・11・13(土)▲

夜、NHK・TVで芸術祭加番組「さすらい」をみる。演出・構成「佐々木昭一郎」出演「安仁ひろし・友川かずき・遠藤賢司・笠井紀美子・はみだし劇場・木下サカス・その他犬せい。

流れた曲「ライジー・ライダ」のバラード・バイバイラフ・カレライリス・みんなビュイテイフル・笠井紀美子のヴォーカル。

井紀美子のヴォーカル。テーマは「ルネ・マゲリットの絵と同じへ大家族」だ。うか？「ライジー・ライダー」のバラードにのって、ひろしは、ハト「大家族のイメージを追いつつ、日本をさすらい」。

ペンキ屋のヘギターVに兄を道で知り合つた「文の少女に妹を、サーカスの綱渡りの女に母を、歌手・笠井紀美子に姉を、田舎の駝の老婆たちに祖母を、

八あらかじめ失われた家族たち」のイメージをみようよ、ホントのさすらいの旅をしようよ、彼は歩きつづけ、ついにハトの舞う海辺にたどりつく。「曼蛇羅

の「コケオドシ的なデイスカパ」のジャパンに比べればスカッ

とさわやかな一作。NHK風に少々タイクツだが、じよじよに、じよじよに、静かにテーマが浮かびあがる構成はなかなか見事。

てなことを、当時のワタシは思ったのですが、今みれば、もっと切実に感じるかもしれない。3年前のぼくには、八幼なさVに心ひかれるようなことはなかったのだ。ぼくは最近、時間の流れに従ってトシをとれない自分へ気付き始め、いささかうろたえている。ハも「トシだ」なアVなんてのは冗談にもならないようなものだ。どっかの誰かさんとうちがって、八生き遅れ、死に遅れ、何を思いつめてと云われなくても、さっぱり涙がわかりませんVてな感じだ。まるでどおにも転びそうにない自分自身に、少々つき合いかかっている。花「輪のかすかな重さが、今の私の胸にはずっしりと響くんでございます。なんでも響くんで、はなく、花びらむしりながら花占いで、花びらむしりながら花傷にひたつてみようかしらん？

かなし。なんちゃって。ン？俺は男だ！ンナロー！何の話だったか、ハテ？

そう、ハサすらいでした。アキラの唄ではないのです。バイバイ・ラブはサイモンとガーファンクル、みんなビューティフルはアンディ・ウイリアムズか誰かが唄ってたっけ？こんな唄はどオでもよくて、メイン・テーマというべきは、イージ・ライダーのバラードなのだ。ひろしは、ヨタヨタと転がるみたいにかなりカツコわるく、さすうって行く。そのバックに流れるのがイージ・ライダーのバラード。気取りはない。この曲が妙にピッタリくるのだ。

それから、ハサの少女というのが、多分、栗田裕美だったのだらうが、どんな女の曲だったのか、まるで覚えていない。多分、コッホの灯（森崎東）の彼女みたいだ。ポケーとした役だったと思う。

はみだし劇場、木下サトカス笠井紀美子らは、すべて実在の彼ら自身として登場する。つまり、ドラマの中で演技をしてる者は一人もいない。

ぼくは、これも初放送、再放送ともに見ていて、いくつものエピソードのつみ重ねのドラマなので、ハマザレよりよく覚えていて、残念ながら、二回ともモノクロでしかみてない。とにかく、思い出せることを、もう少しくわしく記しておく。

東京かその近郊の下町。ペン

キ屋の見習いをつとめる少年・安仁ひろし（本名）。見習いだから、まだ筆を持たせてもらえず、映画のキャンバンにこびり着いたポスターをかりかり削りつつたり、ノリをぬったり。一日中そればかり。彼の兄キ分（友川かずき）、通称ヘギターは、フオーク・シンガーを夢み、まるで仕事をやる気がない。仕事場でもギターを弾いて唄っている。しかし、そんなヘギターを、ひろしは兄のように親っている。寮の食堂。コちえつ、またカレライスか」とギターは不満げ

ー。ここで「カレライス」のメロディが流れたように思う。ある日、ギターは仕事にいや気がさし、フラリといなくなる。ひろしは、ギターを追って街へ。

雨の日比谷・野音のステージ。誰もいない客席に向って、なぜか、遠藤賢司が一人で静かに唄っている。今もささず、ひろしがやって来て、彼にたずねる。「兄キを知りませんか？いつもギター弾いてるんです。どこへ行ったら会えるんですか？」遠藤賢司が、ボソボソと答える。「知らない！」

ひろしのハサすらいでが始まる。どこをどう歩き、どういう人に出会ったか、よく覚えていないので、思いつくまま並べる。ある街。道を歩いてみると、少女に出会う。多分、栗田ひろみ。彼女が何かで困っていたのを助けてやるとか何とか、そんなところだったように思う。ひろしには、彼女が妹のように思える。或いは、彼女の方で、ひろしを兄と思ったのか？

別の街。一文なし、アテもなし。喫行中のサーカスの綱渡り（空中ブランコだったか？）の男に頼んで雇ってもらおう。動物の世話や走りづかい。ひろしもある。細渡りの女が、ひろしにやさしくしてくれる。が、何か

6

の拍子でサーカスを飛び出して  
しまう。

また別の街。夏。ウンウンい  
いながら、リヤカーを引っっぱっ  
ているひろし。アルバイトで氷  
を運んでいるようだ。せまい路  
地をあっちへウロウロ、こっち  
へヨタヨタ、頼りない。どこか  
から聞えてくる唄声かピアノの  
音にひかれて、ある家へとやっ  
て来る。女(笠井紀美子)は、  
ひろしをみて、中で休んでいるま  
なさいと云う。彼女は不意に、  
「大家族」って知ってる？マ  
グリットという人の絵でぬしと  
話し始め、手に持った紙を裂い  
て、一羽の白い鳥を作って、フ  
ワリ、と飛ばしてみせる。  
突然、何かを思い立ち、引い  
ていたりヤカーを放り出して走  
り出すひろし。大きな氷が、路  
地に投げ出される。  
もう、ひろしにはハスすらい  
の動機も目的も、おぼろげにな  
っている。次から次へと、けい  
れん的に別の場所へ。その度に  
バックにイージー・ライダーの  
バラードが流れる。

四国あたりのローカル線の駅。  
お遍路さん、または野良仕事の  
老達たちが、道ばたで楽しそう

に語りながら食事中。方言な  
ので何を云ってるかはわからな  
い。老婆たちが、ひろしを食事  
に誘う。単線をデイズルカー  
が、ゴトゴトと走り去る。後尾  
の車窓に、笠井紀美子に似た、  
モダンなタツ子の女の肖像画が  
一枚はり付けてある。遠く小正  
く、やがてみえなくなる。ボン  
ヤリとみ送るひろし。

ハはみだし劇場(実在のア  
ングラ劇場)主宰・外波山文明  
——と大書した、ホロ付きの小  
型トラックに便乗させてもらう  
ひろし。三人きりの劇場。核か  
ら旅のドサ回り。往來にトラッ  
クをとめて、やにやに大チャン  
バラ剣をおっぱじめ、ひろしも  
それに加わる。もの珍しそうに  
眺めるヤジウマ。チャンバラが  
いつしか真剣味をおび、本当の  
ケンカみたいになっきて、ど  
こまでも、どんどん追いかけて  
行く。追われる方も真剣？竹光  
で斬られると、本当に死んだふ  
りをする。もう見物人はいない  
くせに、芝居に戻っている？  
ひろしは、また突然、トラッ  
クを飛び降り、再び一人になる。  
ひろしは、ホンヤリと自分が探  
しているもののイメージを捉え

はじめる。そして、海へたどり  
つく。足もとの白い鳥が一斉に  
空に舞い上がり、ひろしを包む  
。ここぞハスすらいは終る。

ルネ・マグリットの「大家族」  
という絵は、ハトかかもめか知  
らないけど、一羽の白い鳥が、  
翼をひろげ、青い空に飛び立つ  
ところを描いている。(だとと思  
う。よく知らない)ぼくも好き  
な絵だ。なぜ、「大家族」とい  
うのかは知らない。



ハスすらい  
をみた次の年  
の2月、ぼく  
は、GYAさ  
ん(村上知彦  
氏)にくっつ  
いて、NHK  
大阪の人と共に、代々木の放送  
センターを訪れたことがある。  
そのNHK大阪の人に聞いたら  
ハスすらいは、数万だか十万  
ファイルだかのフィルムを撮影  
に使ったというので、びっくり  
した。90分ドラマだから、完成  
フィルムは邦画と同じ、七八千  
ファイル(二十数万メートル)  
だろう。十万は大げさとしても、



10月15日 (火曜日)

**NEWS**

00 ニュース解説  
 15 夢の島少女 (昭和49年度芸術祭参加作品)  
 (作・演出)佐々木昭一郎 (撮影)筑城吾郎 (録音)太田進發 (音楽)渡辺晋一郎 (効果)岩崎進 國中尾幸世、横倉健児、若林彰、友川かずき、夢のような少女を慕う一少年のひたむきな愛。捨て去り、かえりみようとしない現代への疑問符

11  
 11:30 四 園 (11:45で終了)

# △夢の島少女▽

作・演出 佐々木昭一郎  
 カラー・75分  
 出演 横倉健児・中尾幸世・若林彰・友川かずき・菊地とよ

74・10・15 NHK・GTV  
 49年度(オチ9回)芸術祭参加TVドラマとして放送  
 何か受賞すれば、再放送の可能性もある。12月中旬のNHKの番組に注意するべし!

へさすらいをみた後、しばらくすると、佐々木昭一郎の名も忘れてしまい、夢の島少女が放送されることを知った時、3年ぶりに彼の名を思い出した。期待に胸おどるかんじだった。そして、期待以上のすばらしさ

だった。これまでの経歴がなかったとしても、佐々木昭一郎こそ、わが国最高のTVディレクターであるとは、きりいえる。ぼくと同じことを思ったであろう、YOTA池田博明氏に、まずは夢の島少女を語ってもらおう。タイトルはぼくが勝手につけさせてもらう。

## 夢の島少女論

★YOTA★池田博明  
 補足★M・G・MAO

アバン・タイトルおごそかにクラシックのオルガン曲が流れる。タイトル「夢の島少女」モノクロで、二、三行の詩のような字幕が数カット。我々は深い眠りにおちている。遺失物を探しつづけているというように文句だった。最後のクレジット、本篇はタイトル「夢の島少女」(MAO)で見ると、見る者のあらゆる先入観を打ちくだく迫力をもち、75分間、考えとどまる

ことができなかった。それほどのひきこまれたのである。カツシンの「顔役」以上といってもよい。これは最大級の賞讃なんだ。セリフが足りない。ドラマらしくもない。だが、映像詩といっている。こぼれおちるものが多すぎる。いったい、これは何だ?

セリフは極端に少ない。思ひ出してみると、二人の主人公少年と少女の間には、ほとんど何の会話もない。会話は全くない。ものはなかつた。(MAO)

夏、海につかっている所を拾った少女。小夜子(入水自殺を計ったのだ)をか)の過去やを無視して、現れ、現在と、あながは幻想と、夢が、時間や

10月15日・夕  
 中日新聞より

▼中尾幸世▼ テレビ出演は初め。今夜の芸術祭参加作品「夢の島少女」の監督。H.K.火曜10・15のヒロイン役、佐々木アキラの一回だけ決定した。田舎の高校を卒業して東京へ出てきた幸世が、都立の片すみで生きる孤獨な少年との出会いを、その少女と描くというもので、その少女もひと目で海を想わせるようなひとみらしい女性、という設定だった。親にも相談しないで出演を即座にOKしたという彼女、想像力たっぷり、自由に演技をしていた。

今晩の夢の島

空間を自在に跳梁するように、  
ドラマは、ストーリーその他い  
っさいの限定をすてる。  
遠心的なドラマである。

少年一ケンは、気を失って  
る小夜子を引きあげ、ほおを叩  
いてみて気付かせようとし、背  
におぶろうとしてゐる。重い。  
やつと背にのせることができる。  
少女の足はのびきつてゐる。ワ  
ンピースは濡れて少女の身体に  
ひつついてゐる。お尻のあたり  
もぐっしよりだ。滴がたれそう  
だ。むきだしの太ももがまぶし  
い。少年は少女の重さに耐えな  
がら、しがもその重さが歩調を  
早めてくれるかのようにならな  
く、フリーカメラがいい。ほどなく  
着く少年の部屋。小さな家。少  
年は少女をぬかせる。眠れ。眠  
れ。淡い光。

少年の「眠れ。眠れ。眠れ」とい  
うささやきに、少女の「どこな  
の？どこへ行くの？」というつ  
ぶやきが重なる。少女は夢みる  
ように、過去を回想し始める。  
トネルをぬける列車——その水  
は少年の幻想でもあるのか？

少年は、少女の夢に過去の中心へ  
入って行くために「眠れ。眠れ」と  
ささやくのか？とにかく、二人  
の間にコトバはない。(MAO)

小夜子。無口な少女。集団就  
職で東京に出てきた少女。どこ  
かの工場に務める。白い服。み  
んなが机を前に坐つて、合唱し  
てゐる。取場レクリエーション  
のひとつ。スワビヤ尾謡の「望  
郷」だ。ふるさとの花よ薫る  
かいまも 旅路はるか かがや  
けい つも…

ここはYOTAの記憶ちがい  
かもしれない。田舎の高校で、  
音楽の時間にみんなで合唱して  
ゐるのだ。(MAO)

少年は、下うけのオモチャエ  
場の手伝いをやつてゐるようだ。  
ゴム人形の小さな首を沢山並べ  
た箱を運んだりしてゐる。少女  
は、浴衣を着せられ、ぬかされて  
ゐる。

少年のアパートは川っぶちに  
建つてゐる。部屋の窓に、大き

な日本人形を抱いて少女が寄り  
かかっている。少女も人形も、  
オカツパの髪である。それから  
少年が少女をみつけるのは、Y  
OTAの云うように海ではなく  
これも川の岸辺だったろう。(MAO)

少年には友だち(友川かずま)  
もいる。だが、今は、少年には  
少女が大切だ。ゆけもゆからず  
追いたてられた友だち。「もう  
来てやんぬえぞー」。

少年は友だちに何も答えよう  
としない。「もう来てやんぬえ  
ぞー」という口調から、大して  
親しい友だちではないことが察  
せられる。少年は、もともと、  
ひとりぼっちなのだ。(MAO)

少女、稚い感謝の書き置きを  
残して少年のもとを去る。浴衣  
が、きちんとたたんである。少  
年は、浴衣を手に、少女の残り  
香に顔をうずめ、声を出さずに  
泣きくずれる。

少女の帰郷。「八森」の駅で  
降りる。八森は秋田県の北部、  
八郎湯の北方にある。



いく。これがテーマ曲。  
 つつましい、しかし溢れる喜  
 びをこめてただ音階を下降して  
 いく美しい旋律を「発見」した  
 という少女の微妙な感受性。心  
 の動きを時には緻密に、時には  
 ダイナミックに表現する演出の  
 冴え！

少女は、くり返し二度三度も  
 「これ、あたしが見つけたのよ」とい  
 う。帰郷した時を除けば、少  
 女が明るい表情をみせる唯一  
 の瞬間だ。これが、このドラマ  
 のキ・ワードかもしれない。  
 男おとなには、それがわか  
 らない。つまらないことだ。  
 (MAO)

どんな順序で、どんなシーン  
 が現われたのか定かには思いつ  
 けず、きわめてあやしい記憶を  
 たどっているのだ。メモなんて  
 取る余裕を持たない程、息もつ  
 かせない程、それほど、すばら  
 しいドラマだったのだ。  
 少年の日常。  
 スルーマーをはいた中学時代  
 へ高校か？の少女。なんかス  
 ポーツもやっていたと思う。バ

レーボールだったかな。

ぼくには、そのような記憶は  
 ない。YOTAは「サインはV」  
 の見ずまか？なんかやっつて、ゴ  
 メンゴメン。忘れた。(MAO)

おとなの部屋を訪れる少年。  
 少年を無視しているおとな。少  
 年、「おまえ、人間の扱い方知  
 らぬえのかよー！」と怒りを爆  
 発させる(もちろん、少女のこ  
 とで男を責めている)。もって  
 た刃物で、おとなを刺す。倒れ  
 るおとな。幻想？  
 家へ向い、走ってくる少女。  
 倒れる。指を何かで刺した。走  
 る。

制服の少女。指に包帯をして  
 いる。これも中学の時。  
 汽車に乗り少女を探しにい  
 少年。少女、車窓をぼんやり見  
 つめて坐っている。少年は立っ  
 ている。ふたりは同じ汽車に乗  
 っているのか？そんなことはわ  
 からない。どうでもいい。は  
 八森に着いた少年、少女の居  
 所をたずね歩く。  
 火事。小夜子と婆ちゃんの家  
 が燃えている。小夜子はどうな

ったのか。婆ちゃんはどうなっ  
 たのか。わからぬ。回想(ヶがす  
 るのは、ここだったかな？)

この辺り、よくわからぬ。  
 この辺りが、どの辺りなのかさ  
 えわからぬ。少女が指をヶが  
 するのとは過去である。やみくも  
 に駆ける。テーマ曲。カメラは  
 めちゃくちゃにゆれて、少女の  
 後を追うが、音楽は淡々と流れ  
 る。少女は、自分の家がなく、  
 廃屋のような所へ駆け込む。血  
 のついた指のアツプ。何がどう  
 したのか、さっぱり。  
 燃えるのは、小さな納屋みた  
 いだった。これも意味不明。少  
 年が炎をみつめていたか？  
 海岸にうちあげられた水死体。  
 奇妙な葬列eセシ。

少年が駅に降り立った時、カ  
 メラはハレーションを起し、す  
 ぐ正しい露光に戻る。  
 また、東京の男のマンション  
 の外景を写す時も、同様だ。前  
 者は、ぶっつけ本番の撮影でそ  
 うなったとも思えるが、後者は  
 明らかに意図的。どういう意図  
 か？

幻想によつてしか、少年の入  
って行けない世界——といえる  
かもしれない。男を刺すのも、  
小屋を焼くのも、少年の作り上  
げたイメージか。少年は、少女  
の死——という考えにとりつかれ  
ているのだらうか。

少女が涙もぬからず走る。何  
かから逃げている。少年は、現  
実であれ幻想であれ、少女を追  
い求めつづけている。画面はそ  
れ以上を語らない。また、それ  
で充分なのだ。画面は夢のよう  
に交錯し流れつづける。(MAO)

霧雨がふっている国道で、少  
年は、車をとめようとしている。  
車はとまらない。  
少女とおとなが乗っている車。  
少女が降りる。立っている少女。  
この辺り、どうだったか、全然  
記憶が定かでない。

街へ戻った少年は、松葉杖を  
白くぬって、雨の中、路上で男  
の車を待ちうけるのである。び  
っこをひき道を横切る。男の赤  
い車がとまる。少女は少年にと  
りあわない。松葉杖をふりかざ  
して、男に殴りかかる少年。同  
じカットのリピート。

この時の少女は、紺のミニ・  
スカート。別の時、少年が男の  
部屋(?)に一人いる少女を連  
れ戻そうとする。少女は少年を  
無視。この時も、同じ衣装。衣  
装の区別で、どうにか少女の置  
かれたシチュエーションが判る。  
また別の時、少年が男(一人  
だ)の車をとめる。男、少年を  
乗せ「どこへ？」とたずぬる。  
少年は「夢の島の駅まで」と答  
える。夢の島の駅——とは何ぞ  
や?そんな所は、あり得ない。  
これらはみな、少年の幻想—  
—というより、想い、そのもので  
あり、ウソもホントもない。ど  
おでもいいのだ。(MAO)

ラスト・シーン、少年は少女  
を背におぶって、大地を歩いて  
いる。少年と少女をフォロワー  
していたカメラが、ふたりの周リ  
をゆっくり回って、次第に上空  
にのぼってゆく。

少女を背負った少年は、歩き  
つづけている。少年は再び少女  
を得たのか。あるいは、ファイ  
ラスト・シーンにつながるのか。  
わからぬ。それでも感動する  
のだ!  
再放送された際には、ぜひみ

んな見よう。今度は少し落ち着  
いて、要点をメモしておこうと  
思うのだ。

ラスト・シーンは、たしか、  
こんな凡である。  
まず、海に突き出した堤防の  
ロング・ショット。パン。  
少年が埋立地の上を、はじめ  
と同じ、赤いミニのワンピース  
の少女を背負って歩いていく。  
ミディアム・ロング、または、  
ロングなので、ふたりの表情な  
どはわからぬ。そして、カメ  
ラは回りながら、ハリ・ショツ  
トへつづき、ふたりは小さく小  
さくなつてゆく。

ラスト・シーンの直前が、ど  
んな情景だったのか、それも忘  
れた。たしか、少年と少女が、  
初めてふたり並んで、おだやか  
な表情でどこかを見つめている  
カットがあった。そのあたりか  
ら、すぐにテーマ曲が低く流れ  
、いつのまにか曲がじよじよに  
盛り上がり、気が付くと、ラス  
トだった、という次第。  
そして、ごく、あッ、セリと、  
モノクロのクレジツトが、読み  
とれないほど手短かに現われ、  
消えて、終わる。(MAO)

夢のまた夢 / 夢の島少女 / しまかせ対談

(構成★MAO)

YOTA★池田博明×MAO★藤田真男

MAO 〇みたか、夢の島少女

YOTA 〇みたよ (と、さり

げなく)

M 〇な—— (と、万感こめ)

MY 〇ウーム

MY 〇すばらしい!

MY 〇よくゆかんなかったけど、

Y 〇別に難解じゃない。なの

に、ゆかんない。

M 〇それでも大感動できる。

Y 〇そう。なぜ感動するのか

それがわからぬのだ。けど、

とにかく今年のTVドラマのベ

ストはこれだ!

M 〇ぼくは、生涯のベスト・

ワンに決定! 何といつても、ラ

スト・シーンでは本当に涙が出

てしまつて、TVみて泣けたな

んと初めてなんで、我ながらお

どろいたのだ。ホントに。

Y 〇少年が少女をおんぶして

歩いてる。それだけなのにね。

M 〇ラストだけみても、どオ

というこもない。また、ラスト

がなければ、それまでのゆふ以

上では感動しないと思う。

Y 〇ナ又!? それじゃ、お風呂

のシーンに心うたれなかったと

ゆーのか? この人でなし! もう

知らん!

M 〇いや、画面はすべて均質

なんだよ。ただ、ラストでは、

それまでなかった、ある自然な

統一が生まれるようになった。

Y 〇たしかに、映像が美しい

というようなことはないね。モ

ノクロでみたから、よくわから

なかったけど。

M 〇ぼくは、ゆげゆげ帰省し

て家のカラーTVでみたけど、

カメラもカラーも、あたりまえ

のドキュメンタリー調だ。

Y 〇ただ、構成というか編集

が、とてもついて行けないほど

目まぐるしい。顔役もみたい

な油ぎった迫力じゃないから、

シンドイという感じはないけど、

M 〇アツプも少ないしね。ふ

つうの意味での迫力じゃない。

Y 〇みてるそばから、ごんご

ん忘れてたみたい。セリフが画

面の流れを補うというこもない

し。

M 〇セリフは本当に必要最少

限まで捨て去られてる。主なセ

リフといえは、さっきのへ論

の中にあげたのでほとんどすべ

てだよ。

Y 〇それで75分だからね、信

じられん。

M 〇時がたったから記憶がア

イマイになる。というふうなも

んじやない。まあ、記憶力は

いぢやないけどさ。ほんとに

みながら忘れてく。

Y 〇夢みたくに。夢っていう

のは、半ばめづめかけてる時に

へみるVものだ。へみるVと

いうのは、つまり、ほんやり覚

えている部分をいうわけね。

M 〇ほとんども忘れちゃう。し

かも目がさめて、その後、夢

を忘れてしまう瞬間があつて、

その瞬間を通りすぎて、なお記

憶に戻ってきたものが、いわゆ

るへ夢なんだ。

Y 〇そういう体験と、とても

よく似ているね。このドラマを  
みるってことは。

MII 意匠と無意匠のはさまに  
まさに跳梁している、としかい  
えない。

YII ストーリーも、ほとんど  
ないに等しい。カット割りも一  
見デタラメ。あえて、ぶつうの  
ドラマのように説明しようとする  
み立て直せば、さっきのへ論の  
ような形にはなるけど。結  
局、そんなものは、どオでもい  
いのだーというと言いつけめく  
かなア。

MII でも、やっぱりそうだよ。  
YII いいものは、いいのだ！  
このドラマに閉じては、よかつ  
た！「すばらしい！」だけ  
充分なのだ。あー、またゴマ化  
すみたいで悩んでしまうなア。

MII テーマーというところへ現  
代文明のハメルヘンだの  
というところを当てはめた紋切  
り型になつてしまふけど、それ  
では、ひどく空しい。

YII 何ひとつ、すくえない。  
コトバを捨てていくドラマだか  
らぬ。  
MII 遠心的ドラマとは、さす  
が、うまいこというなア。じゃ

中心には何かあるわけ？  
YII サア、はつきりとは、わ  
かつたような、わからぬよう  
な、ハふれあいかな？

MII ただぬくもりが欲しいだ  
け？沖田センセに聞いたらわか  
るかぬ？でも、当らずとも遠か  
らじーじゃないかな。こじつ  
けになるけど、ラストでカメラ  
が二人の周りを回りながら遠  
かってゆくーこれ、まさに遠  
心的。

YII で、中心には二人だけが  
残され、他はすべて切り捨てら  
れるわけか。

「人間の諸々の外的な属性を  
切り捨てていったあとに残るの  
は、無時間的で無意味な世界に  
さらされていく自分の肉体ひと  
つであり、負しさは人間の外側  
をとおっている非本質的な雑  
物を取り払って、人間を自然状  
態へ近接させるのだ」

MII これは、堀切直人が、つ  
げ義春の「季さん一家」につい  
て述べたことばだけども、そのま  
ま「夢の島少女」にもいえる。  
夢の島というのには、これも紋  
切り型でいえば、現代文明のゴ

ミ溜めということになる。  
YII でも、それじゃ、また落  
ちこぼれてしまふ。

MII 無時間的で無意味な世  
界、それが「夢の島」だ。歴  
史も意味も失われた、無用のガ  
ラクタの堆積ーそこで少年と  
少女は、あらゆる意味関係から  
自由なのだ。

YII それか、さっきいった、  
ある自然な統一ということ？

MII 多分ね、画面の流れと音  
楽の流れ（B・G・M）だけにな  
く、唄も者も含めたも、ラス  
トに至って初めて調和する。別  
別の河の流れが海へ出たように  
佐々木昭一郎の「3作」とも、みな  
海で終っているのはそのためだ  
らうね。もちろん、3作通して  
少年にとっての海は変化してい  
る。それは、もちろんへ成長  
ということじゃないし、また、  
母なる海へ胎内回帰願望と短絡  
させるのもまちがっているように  
思う。

YII じゃ、「マザー」でのハ  
ばくの家と、「さすらい」でのハ  
バ大家族と、今度の「夢の島」  
は、一つの永脈なんだね。  
MII うん。どこでどう結びつ  
いているかは、よくわからぬ

何ぞ、多分、そうだと思ふ。

Y 二は、もう流れは終つて、意味コトバがない、ということだぬ。だから、少女のピアノとこれ、あたしがみつけたの、というセリフからテーマ曲へ移つて行くところがキイ・ワードというわけね。カノン型式のテーマ曲を使ったわけがわかる。ドシラの旋律がテーマを追いかけ、ラストで一つになる。とここで、少女の口ずさむ「私のボニー」云々という唄は何？

M 二「サー、Bring Back、Bring Back、My Bonnie to me、てな歌詞だと思ふけど。昔、ぼくも学校で唄ったような気がする。知らないか？

Y 二「望郷」の方は、いろいろ調べてみて、ようやくわかった。歌詞はドラマのものとは違つたけど。テーマの方は、大体、バツハのカノンを元にしてると思ふ。

M 二「TVガイドには八音葉・海辺晋一郎とあるけど、これは、地辺晋一郎のミスだろう。今年の芸術祭ラジオ部門に、彼の「ダイモルフィズム」という

パイプオルガンとオーケストラのための曲が参加した。ぼくはクラシックには全く無知だからバツハもベートーベンもわからなないけど、とにかく、「夢の島少女」のテーマ曲は、すばらしかった！

M 二「おぼつかない足どり少年は少女を背負つて歩きつづける。カメラは旋回しながら上昇して行く。ひどく不安定だけれどやさしく包み込む。遠ざかる。この時のカメラの、ひいては我々の視線は、すごく重要だ。このラスト・シーンで何か思い出さなかつた？

Y 二「サー、何だろう？ 頭で感動を受けとめられるようなものではなかつた。

M 二「つげ義春の「紅い花」のラストね、ぼくは「夢の島少女」を見終つた時、まずそれが浮んできた。さっき堀切直人の女を引用したのも、それがあつたからなんだよ。

Y 二「なるほど、似てるなア。「紅い花」も、少年が少女を背負つて花畑の向うを歩いている

ロングで終わっている。その時の二人のやさしさは、我々には聞き取れない距離がある。少女もオカッパだ。

M 二「しかも、ラストの小さなコマの中の地平線は傾いている。これは「夢の島少女」の不安定なシヨットと同じなのだ。どねぼくは「紅い花」は、昔、読んだきりで、少女の名前を忘れちゃつて、何ていう名だったかなーと考へてたら、さっき不意に思い出した。

Y 二「少年が、シンデン（新田）のマサジ。少女は、キクチ・サヨコ。じゃなかつた？ ン？ サヨコか？

M 二「そうなのだ！ 小夜子と書かないから、コロッと忘れてたけど、小夜子「サヨコとわかつて、「夢の島少女」は絶対、佐々木昭一郎の「紅い花」であろう、とね、確信した。

Y 二「そうかア！ これぞ少しはわかつたよ。すると、あのラストで少年はマサジのように「眠れやミ」といつてるかもしねないね。ナットクー。

M 二「そういうこと。  
(74・11・15 未完)

# TEST

## PATTERN

あとがき

いささか冗長だったけれど、16ページを費やしたところ、ぼく自身、佐々木昭一郎の世界がみえてきたような気がする。もちろん、わかっていることの方が、はるかに多いだろう。ここには、あくまでも表層をなぞって見たにすぎない。佐々木昭一郎の名を知っている人は多くはないだろうし、ここに述べたことから、はたしてどれほどのことをわかってもらえるか心もとない。

私の気持ちがあまく、あなたに伝わるかしら？  
 M 心に思う半分もいえないこと（アグネス★星に願いを）  
 ようするに、佐々木昭一郎というTVディレクターがいることを覚えていてほしいのだ。そして「夢の島少女」が再放送されたなら、ぜひ見てもらいたいたい。それがムリなら、何年先になるかわからないけど、彼の次回作

を見てもらいたい。  
 つげ義春の読者である人になら、佐々木昭一郎の世界を、おぼろげかもしれないが想像してもらえないことと思う。つげ義春も知らない人は、「ガロ」の青林堂に注文しよう！そして、「映画評論」71年4月号、堀切直人の「つげ義春あるいは洞窟から迷宮へ」という論文も、ぜひ目を通すべし！この、つげ義春論は、かなりの部分を、そのままたとえば——

「だが、表現には対象化と意味賦与作用が絶えずつきまとい、ずにはいられないのであるから、当然、つげの表現は意味と無意味とが交錯する場となる。  
 無意味の表現なるものは、それ自体逆説的な存在であり、いかえれば、表現の不可能性の表現であり、無意味の不可可能性による無意味の捕捉であるために、こうした表現は表現の死滅をめぐらせる運動としてみずからあらわす。彼の作品はそのような表現と無意味との敵対関係（アンタゴニズム）

の引き起す運動の軌跡なのである」

表現の死滅をめぐらせる運動の軌跡——思えば、八作品に表現の存在し得ないTVにおいてこそ、このような逆説的な敵対関係が生まれてきて当然なのだ。佐々木昭一郎の「アドキコメンタリー・ドラマ」が、まさにそれである。八作品「対八番組」。「毎日新聞」10月31日付「映像時評」で、園本博が「夢の島少女」にふれて、TVにおける「記録」について述べている。トチ狂ったTVドキコメンタリー論としかいえない雑文だが、論のまくらとして、佐々木昭一郎の短いコメントが引用されている。  
 彼は、「夢の島少女」を演出するにあたって、ドラマトウリングーをその「一回性」によったというのだ。  
 ぼくは「さすらい」のところで、佐々木作品を、素人TVドラマだといいた。ことばのアカカもしれないが、ウソをいうつもりはない。ただ、そんな反にいうと、いいかげんな即興的思いつきを並べ、ストーリーイなど

★YAS版「漫画だけしか頭になかった」の、ぼくの「草笛のころ」評も読み返してみて下さい。

初めから度外視した、いわゆるハハフニングとやらを安売りするドラマへ非ドラマのようにとられかぬない。そうでは無いのだ。ドラマトウルギーの一回性、表現の不可能性との敵対において、ストーリーやシチュエーションは仮設され、捨て去られるのである。

ついで作品と佐々木作品の軌跡を重ね合せて、もつとくわしく検討すべきだが、そろそろ紙数も尽きるし、忘れてしまったこととが多すぎる。いくつか気付いた点を並べるだけにします。

「夢の島少女」で少年は汚くよどんだ川から少女を拾う。ついで義春「山椒魚」での地下水道の上流から流れてくる胎児の死体のようだ。

少年の飼っている文鳥は、ついで「チーコレ」を思わせる。ついで「小夜子の婆ちゃん」で「さすらい」の老婆たちは、「おなじ式」で「ゲンセン館主人」の老婆に生まれ、小夜子やおひろしに非性的な小児的なやすらぎ、なつかしさ

II 故郷II を与えるが、それは一時的なものにすぎない。お風呂は、羊水。といえは考えすぎ？ひろしが出会うのが、霊場めぐりのお遍路さんであったのなら、これは、こじつけとはいえぬ。「さすらい」に「性」がぬけおちているのも注目すべきだ。性的対象としての女性性は、ひろしのハサすらいを止め、定着させるだろう。笠井紀美子は「母」というより、「マザー」のイメージが女性性に似た設定だろう。それから、「夢の島」少年は「マザー」の少年と同一人物であるようにも思える。二人ともケンという名だったか？面影が残っているように見えるし。

「マザー」から「夢の島」まで、少年の生は肉じられた四環であり、過去は空白、無時間世界にいます。小夜子の生は有限で直線的。大人になりつつあり、大人になれず、過去や死へ逃げようとする。

汽車が次々とトンネルをぬける。少女の夢または回想への入口、そこへ少年の幻想が同乗する。光・闇・光・闇：すなわちへ時間である。少女は過

去へさかのぼり、へ帰郷するのだ。主題に通じる重要なセリフ「夢の島の駅」——それは八時間への線上にはなく、少女を自分の世界へ引き入れようとする少年の想像力の中にあるのだろう。八銀河鉄道!!  
三作を比較し、更に対象とカメラの視線の関係と表現について考え出したらキリがないように思うので、それはやめとく。いそんな意味で、「マザー」と「さすらい」を合せたのが「夢の島少女」であるように思う。ラスト・シーンの二人の姿は、0時を指したまま、重なり合っ

てピタリと停止した時計の長針と短針に似ている。

とにかく、佐々木昭一即ち、我々の魂の内に深く根を下した「遺失物」を探り出そうとする。恐しく、鋭くナイーヴな感性をそなえ持つ人であるといえる。(MAO)

★次号予告★  
次号は、ガラリ一転、ハードボイルド・ギャグ・アニメ・コルパン三世「特集」・サッポロ(YOTA)から出ます。乞御期待!

★当番組に対する御意見・感想など御寄せ下さい!  
★次号御希望の方は、YOTAまたはMAOまで申し込んで下さい!

付録1 『日曜日にはTVを消せ!』

第1号 正誤

池田博明

おぼろげな記憶で書かれたため、誤りがあります。作品の内容を記述したところはけっこう記憶違いがありますが、キリが無いため、いくつかを記録しておきます。■が誤記で、□が追記。(2004年2月現在)

=====

10 頁中段

- 田舎の高校で音楽の時間にみんなで合唱しているのだ。
- 少女が歌っているのは中学校の教室だった。中学卒業後、都会に働きに出てきたのだ。
- その後の調査で、教育芸術社「中学生の音楽2」(中学2年生用の教科書である)に「望郷の歌」(3部合唱。宮沢章二作詞、ドイツ民謡)として載っていた(1971年から検定済で使用)。ちなみに『夢の島少女』の放送は1974年。さし絵を安野光雅が書いている。そして、この教科書では「望郷の歌」の次の曲が「My Bonnie」(イギリス民謡)。小夜子が中学で使用していた教科書はこれに違いない! 「望郷の歌」自体は昭和30年(1965年)には、「小学生の音楽6」(音楽之友社)には「わかれ」(小林純一作詞)として載っている。歌詞は「うるわしき 花は 梢を飾り 楽しげに 鳥は さえずり 鳴けど さらば さらば 友よ さらば 別れ行く 朝(あした) ここに 来たりぬ」。古くから親しまれている曲なのだ。スワビヤ民謡とは確かなにかの楽譜集にあったと思うが、「スワビヤ」という地名は見つからない。

=====

10 頁下段

- 少女、稚い感謝の書置きを残して少年のもとを去る。浴衣がきちんとたたんである。少年は浴衣を手に、少女の残り香に顔をうずめ、声を出さずに泣きくずれる。
- 少女が少年のもとを去るのはもっとずっと後でした。

=====

11 頁下段

- 少女の弾くピアノの音がやがてバッハのカノンになって
- 少女の弾くピアノの音がやがてパッヘルベルのカノンになって

=====

12 頁下段

- 血のついた指のアップ。何がどうしたのか、さっぱり・・・。
- 中学時代にあずま屋で、少女は暴行されたと思われる場面だったこと。毛むくじらの男の腕が少女の顔をつかむ。唇を切り、指をケガし、膝をすりむく少女。

付録2 「紅い花」がTVドラマになった?!

藤田真男

「読者サロン」より月刊漫画「ガロ」

(青林堂) 1975年2月号

昭和49年度芸術祭参加TVドラマ、「夢の島少女」(作・演出=佐々木昭一郎)をみた。これがどうも、つげ義春の「紅い花」を下敷きにしたか、或いはインスパイアされたと思えないような作品だった。といっても、漫画を脚色してそのままTV化したというような単なるリメイクでは、もちろんなく、TVにおける最も尖端的な表現に成功していると思われる、すばらしいTVドラマである。ぼく個人としては「紅い花」よりも好きだといってもいいし、じっさい見終わった時には涙さえ出た。

さて、どう似ているかといえば――

まず、ラスト・シーンを見ながら、これは「紅い花」かな?と感じた。少年が少女を背負って埋立地をおぼつかない足どりで歩きつづけている。カメラは二人の周りを旋回しながら上昇し、そして不安定なヘリ・ショットへ続き、どんどん遠ざかっていく。

「紅い花」のラスト、地平線の傾いた小さなコマにそくりなのだ。構図だけでなく、二人を捉えるカメラ・アイ(作者および我々)との関係(無関係)まで同じである。すなわち、オカッパの少女を背負って花畑の向こうを歩いて行くシンデンのマサジのやさしさはく内に向って開かれているが故に、我々にとっては関知不可能なものであるということ。「夢の島少女」と「紅い花」は、その表現を支えるくまなざしにおいて同質の作品なのだ。

「夢の島少女」の出演者はわずか5人。すべて素人である。そのうち、役名のあるのは少年と少女だけ。他の三人は少年の友人、少女を傷つける男、少女の故郷の婆ちゃんという設定で名はない。少女の役名は小夜子。姓はない。婆ちゃんを演じる老婆の名(本名)は菊地とよ。そおすると、菊池小夜子=キクチ・サヨコではないか?!そして小夜子もオカッパなのだ。偶然にしては出来すぎた話だ。婆ちゃんは秋田県八森の人である。「紅い花」の舞台はどこか知らないが、ひょっとして八森あたりがキクチ姓の本場(?)なのではなからうか、などと気を回

してみたりするのだが・・・ハテ?

「夢の島少女」には、他にも、つげ作品と共通すると思われる本質的な要素が多くみられたようだが、それはひとまず置く。また、このTVドラマの圧倒的なすばらしさは、とてもここでは語り尽くせるものではないので、それもしない。ここに、もうひとつの謎がある。よその雑誌を持ち出したりして悪いけれど、「宝島」12月号の投書欄にこんなことが書かれている。

「去る10月15日の夜NHK・TVで『夢の島少女』をみて以来、NHK職員としての鈴木志郎康に、あるいは16ミリカメラマンとしての鈴木志郎康に尊敬の念を抱いています」

残念ながら、ぼくは「夢の島少女」のクレジット・タイトルをよく覚えてはいないので、スタッフの中に鈴木志郎康(鈴木康之)の名があったかどうか定かでない。だが、つげ義春→鈴木志郎康→佐々木昭一郎とつながるとすれば、「夢の島少女」を「紅い花」TV版だと考えやすい。

以上、すべてぼくのこじつけにすぎないかもしれない。ぼくの考えが当たってしてくれる方が嬉しいけれど、鈴木志郎康が佐々木昭一郎に直接たしかめてみれば、謎はすぐ解けるのだが・・・。

そこで、お願いします。「ガロ」で、つげ義春・鈴木志郎康・佐々木昭一郎を招いて、テーマは何でもいいから、ひとつ座談会でもやってくれませんか。漫画・詩・TVと三人三様の表現の軌跡を浮き彫りに出きる面白い企画だと思うのですが。無理かなア・・・でも、是非やってもらいたいなア。

(2004年追記) 実際には佐々木さんは、つげさんの「紅い花」を意識してはいなかった。鈴木志郎康さんは共同脚本者としてクレジットされていたが、脚本に関与したのは最初の段階だけだったそうである。カメラマンは葛城哲郎さん。

しかし、数年後に劇画シリーズの一本として佐々木昭一郎演出で「紅い花」がTV化され、「ガロ」誌上でつげ・鈴木・佐々木、三人の座談会が開かれた。この藤田君の投書が、後年の「紅い花」TV版を実現させたと、私は信じている(池田)